

## (2) 国際物流への対応強化

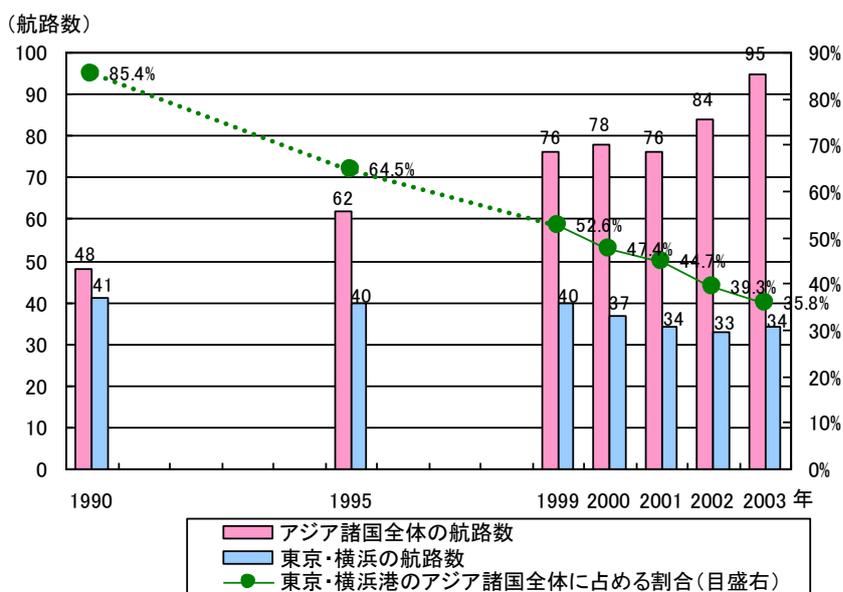
### ① 求められる東京港改革

#### ・東京港の利便性向上

中国、韓国をはじめとした東アジア諸国が、上海港、釜山港など大規模な港湾整備を進めている中、日本への基幹航路の寄航率は減少傾向にあり、東アジアにおける日本の港湾の相対的地位は低下しつつある。

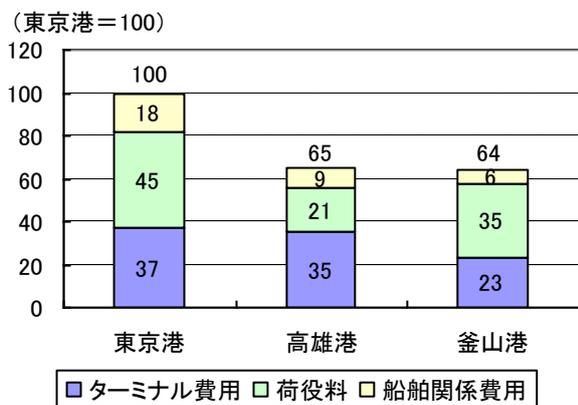
これらのアジア諸港に比べて、日本の港湾は利用コストが高く、リードタイム\*も長い。首都圏物流で重要な役割を果たしている東京港の利用に対して、事業者から、より一層の利便性向上を求める声が多く挙げられており、コスト削減、時間短縮に向けた港湾サービス向上が喫緊の課題となっている。

国は、スーパー中枢港湾として、アジア諸港と対抗可能な国際競争力を持つ港湾を育成すべく取り組んでおり、東京港も横浜港とともに「京浜港」として平成16年7月にスーパー中枢港湾に指定された。



資料 国土交通省関東地方整備局調べ

図 アジア諸国及び東京港・横浜港の航路数の推移



資料 国土交通省調べ

図 40ftコンテナ1個あたり総料金(東京港=100)

日本	: 約2.4日
シンガポール	: 24時間以内
韓国	: 2日以内

資料 (社)日本物流団体連合会調査、ITと国際物流に関する懇談会資料より

図 港湾におけるリードタイムの比較

## ～ スーパー中枢港湾 ～

日本の港湾の国際競争力強化に向けて、『アジア諸国の主要港湾を凌ぐ港湾コスト・サービス水準の実現』を目標として、先導的・実験的に施策を展開していく港湾として、国が指定した港湾を指す。

平成 16 年 7 月に「東京港」と「横浜港」からなる『京浜港』のほか、伊勢港（名古屋港・四日市港）、阪神港（神戸港・大阪港）が指定された。

### ・貨物量増大への東京港の問題点

東京港における貨物取扱量の増加に伴い、港湾施設の受入能力が限界に近づいていることも否めない。コンテナヤード等が不足した状態で多くのコンテナを取り扱うことになると、空コンテナの置場の確保や作業料など、事業者への過大な費用負担となる。また、コンテナ搬出入車両が集中し、ふ頭の背後道路で待機車両による交通渋滞が発生するなどの問題も起きている。

一方で、アジアの港湾に対抗可能な国際競争力を確保するためには、集中する貨物を逃すことなく効率よく捌くことによって、スケールメリットによるコスト低減を実現する必要がある。

### ・これまでの東京港での取組と今後の課題

東京港では、これまでも大井ふ頭の再整備による高規格化、コンテナ予約搬出入システム導入など処理能力向上、効率化の取組を行ってきた。しかし、利用者のニーズに対応し、効率的な港湾物流を実現するためには、ソフト・ハード両面からの更なる改善・拡充が必要な状況となっている。

ソフト面からは、施設利用の共同化や相互融通、ゲートオープン時間延長のほか、公民共同の港湾情報システム構築など、IT 化の推進が必要である。

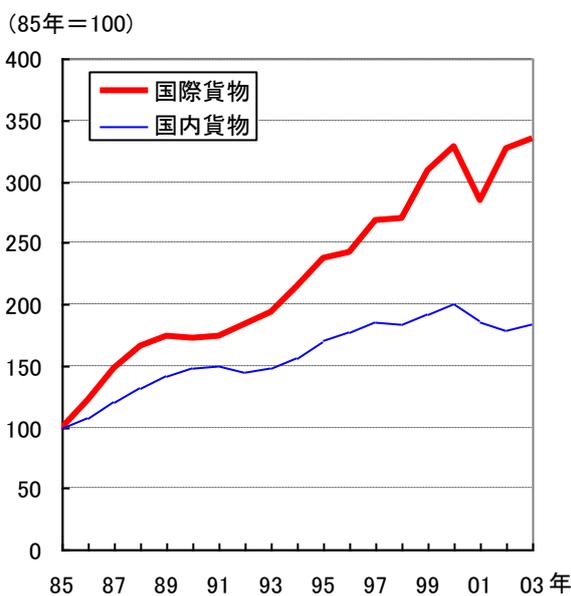
また、ハード面では、既存ふ頭の機能拡張（ヤード整備）や臨港道路整備のほか、中央防波堤外側埋立地での新規コンテナふ頭整備などが挙げられるとともに、港湾と背後圏を結ぶ効率的なネットワークを構築していくことも必要である。

## ② 増大する航空貨物への対応

### ・役割を増す航空貨物輸送

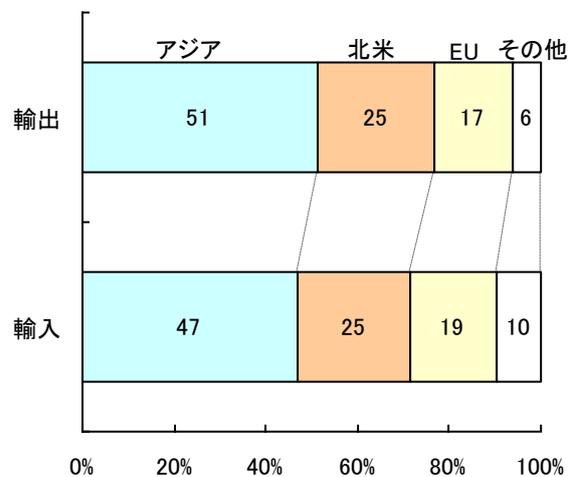
高付加価値製品や時間制約の強い貨物などは、航空機で輸送されることが多く、航空貨物輸送は国際貨物、国内貨物ともに長期的に増加傾向にある。

成田空港は、首都圏及びわが国の代表的な国際航空物流の拠点となっている。成田空港における輸出先及び輸入元は、いずれも中国をはじめとしたアジアの割合が大きく、近隣諸国をはじめ海外諸国との航空輸送が活発に行われている。国際航空貨物の輸送品目を見ると、取扱金額では、輸出・輸入とともに、IC、コンピュータ、光学機器など高付加価値製品が多いほか、取扱量では生鮮食料品の輸入が比較的多く、荷主まで短時間で届けることが重視されている。



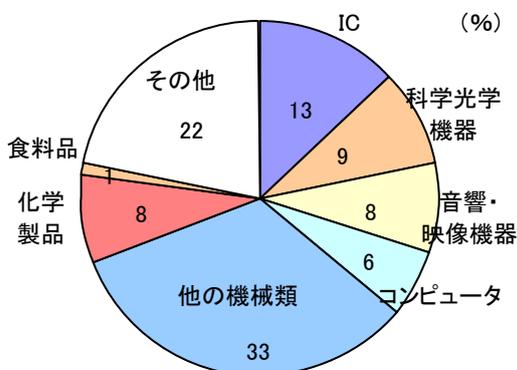
調査対象の事業者による輸送重量を85年を基準に指数化  
資料 国土交通省「航空輸送統計年報」

図 全国の航空貨物輸送量の推移



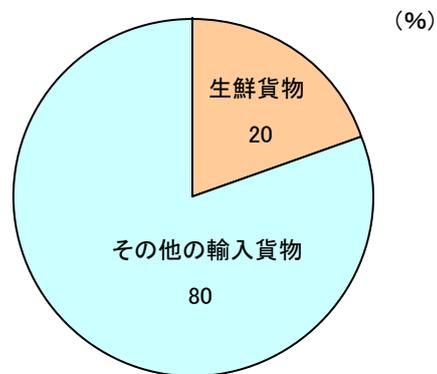
重量による構成比(調査期間:平成16年9月1日~7日)  
資料 東京税関「成田空港の輸出入航空貨物に係る物流動向調査」

図 成田空港での輸出・輸入品の輸出先・輸入元の海外地域別構成比



資料 財務省「貿易統計」(平成16年)

図 成田空港での輸出入額の品目別構成比



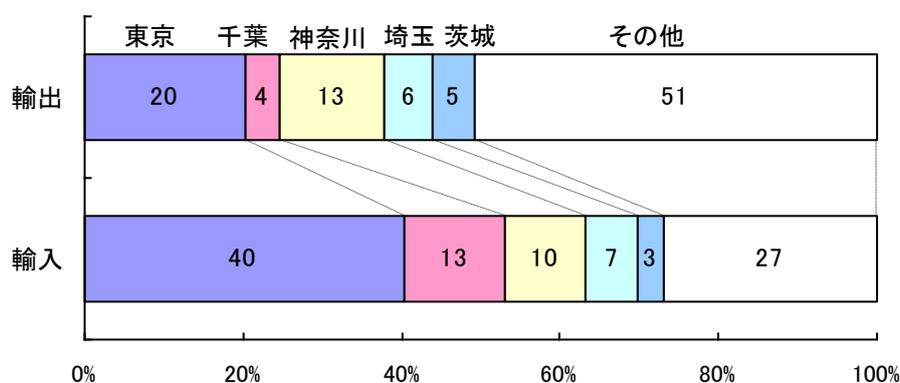
平成15年の輸入貨物における重量構成比  
資料 成田国際空港株式会社調べ

図 成田空港での輸入貨物に占める生鮮品の割合

## ・求められる航空貨物への適切な対応

成田空港における国際航空貨物は、国内各方面との間で輸送されているが、とりわけ、輸入貨物の4割が東京を消費地としており、都民の暮らしを支えるうえでも、成田空港を経由する航空物流は重要な役割を果たしている。近年、成田空港周辺では、国際航空貨物を取り扱うための物流施設の立地が進んでおり、空港周辺での物流施設立地やこれらの施設と消費地間の輸送の効率化・円滑化が重要となっている。

また、羽田空港においては、平成21年末の再拡張後には、発着能力の増強や国際化により国内のみならず国際航空貨物が加わり、取扱量の大幅な増加が見込まれるため、関連する物流施設の立地や道路整備など、適切な対応が求められている。



注 重量による構成比(平成16年9月1日～7日までの1週間調査)

資料 東京税関「成田空港の輸出入航空貨物に係る物流動向調査」

図 成田空港での輸出・輸入品の生産地・消費地の地域別構成比